

被服が身体意識に及ぼす影響 ～自己対象化に基づいて～

田 中 久 美 子

The influence of clothing on body consciousness:
From the viewpoint of self-objectification

TANAKA Kumiko

問 題

女性は男性に比べて自己の身体について否定的な感情を抱きがちであるといわれる。この現象についてはこれまで、女性の美をめぐる性役割観やメディアの影響など外的要因の存在が明らかにされてきた。しかし、これらの要因がどのような身体経験 (body experience) を通じて自己の内部に取り込まれ、身体像の構築に関わっているのか、そのプロセスやメカニズムについてはほとんど解明されてはこなかった。こうした中で近年、フェミニズム的な観点に立つ研究者たち (主に女性による) の間で、女性の身体経験をめぐる個人内要因を明らかにしようとする動きが出てきている。

Fredrickson & Roberts (1997) が提唱した自己対象化理論 (self-objectification theory) では、女性は自己の容姿や外見を様々な「美的水準」との比較によってとらえるようになると (性的対象化)、他者がそれらをどのように見ているかということに意識が向き、外見についての他者からの評価を内在化しながら自己の容姿にますますとらわれていく (自己対象化) と言われている。また Mckinley & Hyde (1996) も、対象化身体意識 (Objectified Body Consciousness) 尺度作成に当たり、女性は、「身体は他者から見られるものとして存在する」という身体経験に基づいて自己の身体を意識する傾向にあると指摘している。一般に、他者との関係性の中で価値観や規範との比較を行うと、自己のネガティブな面へ選択的に注意が向けられる (Markus & Kitayama, 1991) と言われるように、女性が他者の視線を意識しながら自己の外見についてモニタリングする場合も、理想像とのズレを認識する結果、否定的な身体像が形成されてしまうのである。

こうして自己対象化によって生じた理想と現実とのズレや自己の容姿に対するネガティブな感情を低減あるいは解消したいと、多くの女性は食の制限を試みるようになる。ここには容姿や外見は自分でコントロールできるものという信念 (Mckinley et al., 1996) が反映されている。特に体重はある程度自己の管理下に置くことができると考えられるためであろう。しかし実際は、自己の容姿への関心が高く、やせて美しくなりたいと強く願っている者ほど過食しやすい

(Heatherton & Baumeister, 1991) という逆説的な見解もあるように、食の制限がうまく進むことは少ない。これに対して認知心理学的な自己理論に基づく心的資源という観点 (Muraven, Tice, & Baumeister, 1998) からとらえてみる。食の制限 (いわゆるダイエット) は一種の自己規制 (self-regulation) 行動である。自己規制の過程では到達したいと思う要求水準との比較、またそれへの接近があり、自覚状態 (self-awareness; Carver & Scheier, 1982) を高めると同時に多くの心的資源が消耗されている。ひとたび要求水準を満たすのが困難と感じられたり、自己規制に負荷を与える事象が生じたりすると、自覚状態が一層自己の欠点を意識させネガティブな感情を引き起こす。しかし、利用できる心的資源には限界があるために不快な状態からの逃避としての認知的シフトが起こり、自己規制による資源消耗を抑えるべく認知的コントロールの抑制を低下させてしまうというのである。

以上のような自己対象化の過程を実証的に検討したものとして、Fredrickson, Roberts, Noll, Quinn, & Twenge (1998) がある。その実験1では女子大学生に水着かセーターのいずれかを着用させ自己対象化の程度を比較した。その結果、身体への露出が高く、性的対象化が促進する水着群は、セーター群に比べ身体への羞恥心が高まった。また、実験終了時 (普段着に着替えた後) には、チョコチップクッキーの味見という形で食の制限量を調べた。クッキーを食べた量に基づき、「真の制限群」(1枚のうち半分未満)、「象徴的制限群」(半分から1枚未満)、「無制限群」(1枚全部あるいはそれ以上) の3群に被験者を分けたところ、身体への羞恥を感じているほど「象徴的制限群」の割合の高いことが示された。これは、身体への羞恥というネガティブな感情を伴う一種の自己知覚状態にあった「象徴的制限群」において、食への「抑制」と「抑制の低下」との葛藤が引き起こされた結果によると言えるのではないだろうか。

また自己対象化は、Fredrickson et al. (1998) の実験1で見えるような特定の状況下で引き起こされる以外に、特性の1つとしても位置付けられている。Fredrickson et al. (1998) は身体的自己概念 (physical self-concept) に関する10項目についてその重要度を順位付けし、自己対象化特性を測定する質問紙 (The Self-Objectification Questionnaire: 以下SOQと略記) を作成した。またMckinley et al. (1996) も、女性が身体を外から見られる対象として経験するとき重要とされる3要素 (身体への監視 (body surveillance), 身体への羞恥 (body shame), コントロール信念 (control beliefs)) についてその個人差特性を測定する対象化身体意識 (Objectified Body Consciousness: 以下OBCと略記) 尺度を開発した。

以上のことから本研究では、自己対象化を状況および特性の両側面からとらえる。まず Fredrickson et al. (1998) の実験1を参考に、自己対象化を引き起こす状況設定として①自己の容姿を性的に対象化しやすい衣服の着用に加えて、②自己対象化を促進させる要因の1つと考えられる身近な他者の存在にも注目することとした。これらの場面を想定するという設定の下、特定の状況による自己対象化は、自己の身体への意識の高まり (自覚状態) となって自己の身体への羞恥心および後の食行動にどのような影響を与えるのかについて検討してみる。またこの状況設定下で自己対象化が高められた場合、そこには状況的要因の他に個人の身体に対するとらえ方など身体意識の個人差も少なからず関連があるものと予想される。そこで、状況的自己対象化に特性的自己対象化がどのように関わっているのかについても検討する。さらに、自己対象化の個人差特性を測るSOQとOBCについて、状況的自己対象化の結果も勘案しながら尺度としての

有用性について比較検討する。

方 法

1. 調査対象者

京都市内の私立女子高校2年生180名を対象に、ホームルームの時間を利用し一斉に集団で実施した。ただし回答ミスのあった者を除く165名を分析対象とした。

2. 質問紙構成

(1) SOQ

Fredrickson et al. (1998) の自己対象化特性を測定する質問紙で、身体に関する10項目（1. 体の動きのしなやかさ, 2. 健康, 3. 体重, 4. 体力, 5. 性的魅力, 6. 容姿の美しさ, 7. 持久力・スタミナ, 8. 筋力, 9. 体調, 10. 体のサイズ(バスト/ウエスト/ヒップ)) の重要度を順位付けさせた。その方法はFredrickson et al. (1998) に倣った10段階評定で、最重要な項目には9点を、以下順に0点まで得点を与えるというものであった。

(2) 現在及び理想とする身長, 体重の値

最近測定した身長 (cm) ・体重 (kg) の値と理想とする身長・体重の値を記入させた。

(3) 衣服による自己対象化段階

友人とのショッピング場面（試着, お菓子のバイキングの2場面）を想定させた。女子中・高校生（36名）を対象とした予備調査で、肌の露出性が高く、また女性であることを強く喚起させる衣服を自由に回答させたところ、キャミソールを挙げた者が多かった。Fredrickson et al. (1998) の研究で用いられていた水着はどうかと尋ねてみたところ、水着を着るのは体育の授業のみで、全員が同一のスクール水着を着用している場面ではそれほど恥ずかしくも感じないとの回答が多数を占めた。また、本調査を実施した高校では体育の授業で水泳は全く行われていないことなども考慮して、自己対象化を引き起こす衣服として、キャミソールを採用した。さらに、自己対象化は他者の存在も大きく影響することから、友人とのショッピングでキャミソールを試着するという場面を設定した。

《場面1：試着》トップの種類（2：キャミソールのみ／キャミソール＋カーディガン）を被験者間要因として設定した。

①ボトムを選択

トップに似合うと思うボトムをミニスカート、カブリパンツ、ロングスカート、ズボンから1つ選択させた。ボトムの選択によって試着状況のイメージ化を促すとともに、トップに合わせたボトムの選択にどのような傾向があるかを探索的に検討する手がかりとするためである。なお、トップ、ボトムとも女子中・高校生向けの雑誌や通信販売のカタログを参考にし、標準的なデザイ

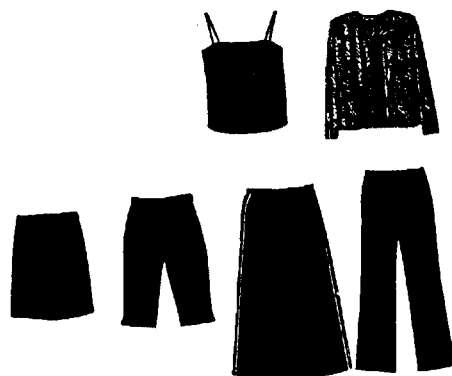


Figure 1 「キャミソール＋カーディガン」条件で用いられたトップとボトム

ンのものを採用した (Figure 1)。

②身体の羞恥

Tangney, Miller, Flicker, & Barlow (1996) より、羞恥心や罪悪感を表す形容詞10語（“決まりの悪い” “おどおどした” など）を選定し、フィラーとして「うれしい」「わくわくした」の2語を加えて、上下を試着してみた自分の姿について羞恥の程度を5段階で評定させた。

③友人評価

試着室の外で待つ友人が、試着した自分の姿を見てどのように感じるかを推測させ、9項目（“かわいい” “似合っている” “かわいらしい” “みっともない” “不格好である” “おかしい” “魅力的である” “見苦しい” “センスがいい”）について5段階で評定させた。

④身体変化の程度

試着後その服上下を買うことにしたが、実際着用するときにもっとおしゃれに見えるようにするため、それまでもし自分の身体を変えることができるとすれば身体の12部位をどの程度変えたいかについて、Fredrickson et al. (1998) に倣い4段階で評定させた。

《場面2：お菓子のバイキング》ショッピング後、友人に洋菓子・和菓子のバイキングに誘われる場面を設定した。そこで、和洋菓子各5品目（計10）の記されたメニューの一覧を提示した (Table 1)。お腹を満たす程度や通常の価格はどれも同程度であるとし、1皿当たりの各カロリー値も併せて表示した（カロリーの値は辻学園監修（1992）の『エブリディ・クッキング改訂版』を参考にした）。

Table 1 バイキングでの菓子メニュー一覧

メニュー	
チョコレートケーキ (350kcal)	あんみつ (250kcal)
フルーツタルト (400kcal)	ところてん (0kcal)
チーズケーキ (250kcal)	大福もち (150kcal)
シュークリーム (200kcal)	栗蒸しようかん (200kcal)
アップルパイ (300kcal)	桜もち (150kcal)

①各菓子について、どの程度好きかを5段階で評定させた。

②最高10皿まで自由に選択でき、その組み合わせ方としては、同じ品を複数皿取ってもよく、また一方で取らないものがあってもよいとした。

③甘いお菓子に対する日常の意識や態度、及びこのバイキング場面で自分の取った行動についての計10項目を5段階で評定させた。

(4) OBC

OBCはMckinley et al. (1996) が開発した尺度で、対象化身体意識を構成する3要素（身体の監視、身体の羞恥、コントロール信念）についての24項目（“他人の目に映る自分の姿を何度も考える日がある” “やろうと思えば、目標の体重に変えることができる” など）から成る。これを5段階で評定させた。

結 果

1. 身長・体重について

165名のうち、「現在の体重」のみを回答していない者が38名いたが、「現在の体重」に直接関わらない分析については、この38名も含めて分析を行った。身長、体重、およびBMI^④について「現在」、「理想」の各平均値を対応のある t 検定で比較したところ、いずれも有意となり、現在よりも背が高く、やせたいと希望していることが示された (Table 2)。

Table 2 現在と理想の身長、体重、BMIの各平均値 (SD)

	現 在	理 想	t 値
身長 cm (n=165)	158.63(5.11)	162.37(4.29)	9.98**
体重 kg (n=127)	49.90(5.74)	45.78(4.26)	8.38**
B M I (n=127)	19.80(2.06)	17.29(1.28)	14.06**

** $p<.01$

2. 場面1の検討

(1) ボトムを選択

トップの条件ごとに、選択したボトムの種類を調べたところ、両条件を通じミニスカートおよびズボンを選択した割合が高かった (Table 3)。

Table 3 トップとボトムの組合せ (人数)

	ミニスカート	ズボン
キャミソール	35	36
キャミソール+カーディガン	43	26

(2) 身体の羞恥について

フィラー語を除く10語について、高得点ほど自分の試着した姿を見て恥ずかしいと感じるように合計点を算出し、身体の羞恥得点を算出した (Table 4)。着用している服による身体の羞恥への影響を調べるため、トップ(2)×ボトム(2)の分散分析を行ったところ、交互作用が有意であった ($F(1, 139)=4.49, p<.05$)。

(3) 友人評価について

「カッコいい」「似合っている」などの肯定的評価計5項目を逆転させ、否定的評価4項目と合わせた計9項目により、友人評価得点を算出した (Table 4)。よって、高得点ほど試着した自分の姿を友人が否定的にとらえると予想することを意味する。着用している服による友人評価の違いを検討するため、トップ(2)×ボトム(2)の分散分析を行った結果、交互作用が有意であった ($F(1, 139)=5.72, p<.05$)。

(4) 身体変化について

身体12部位の変えたいと思う程度を加算し、身体変化得点を算出した (Table 4)。高得点ほど、試着した上下をさらにおしゃれに見せるために身体を変えたいと思う程度が高いことを示す。着用している服による身体変化の程度を検討するため、トップ(2)×ボトム(2)の分散分析を行った

が有意差はなかった。

Table 4 トップとボトムを組み合わせた別の身体の羞恥、友人評価、身体変化の各平均値 (SD)

	キャミ ミニスカート	キャミ ズボン	キャミ+カーデ ミニスカート	キャミ+カーデ ズボン
身体の羞恥 ¹⁾	24.77(8.51)	23.06(7.96)	20.47(8.78)	25.04(8.32)
友人評価 ²⁾	26.34(5.86)	25.11(6.27)	25.05(5.81)	28.65(6.26)
身体変化 ³⁾	19.34(7.57)	18.17(8.29)	18.00(7.69)	18.04(8.52)

得点の範囲は¹⁾ 10～50点, ²⁾ 9～45点, ³⁾ 0～36点

3. 場面2の検討

(1) お菓子のカロリーについて

和菓子に比べて洋菓子の方が高カロリーであるが、洋菓子の方が和菓子よりも有意に好まれ ($t(164)=12.85, p<.01$), 実際取る皿数も多かった。皿数の合計を目的変数、各お菓子の好ましさの合計、身体の羞恥、バイキングにおける行動尺度の5項目を説明変数とする重回帰分析を行ったところ、有意な説明変数は、お菓子の好ましさと1項目のみ（バイキングではたくさん食べないと損である）で、お菓子の選択においてカロリーの値は影響していないことが明らかとなった。

(2) 試着した服と取ったお菓子の皿数との関係について

試着した服により取ったお菓子の皿数に違いがあるかどうかを見るため、洋菓子のみ、和菓子のみ、および全体の皿数を算出し (Table 5), それぞれについてトップ(2)×ボトム(2)の分散分析を行った。その結果、和菓子のみ皿数ではトップの主効果 ($F(1,139)=4.47, p<.05$), 合計の皿数ではボトム的主効果 ($F(1,139)=4.97, p<.05$) が認められた。

Table 5 服の組み合わせ別の取ったお菓子の個数 (): SD

	キャミ ミニスカート	キャミ ズボン	キャミ+カーデ ミニスカート	キャミ+カーデ ズボン
洋菓子のみ	4.57(2.12)	3.72(2.28)	4.61(2.29)	4.19(2.15)
和菓子のみ	2.23(1.87)	2.06(1.68)	1.86(1.74)	1.00(1.19)
合計	6.80(2.59)	5.78(3.01)	6.47(2.86)	5.19(2.75)

(3) 皿数合計の割合について

試着した服別の皿数の平均値を求めたが (Table 5), その分布の様子をFredrickson et al. (1998) の結果と比較するため、皿数合計の割合を服の組み合わせ別に示した (Table 6)。皿数の平均値とSDを考慮し、1～4皿を低群 (制限群), 5～7皿を中群 (象徴的制限群), 8～10皿 (無制限群) と分類した。

Table 6 服の組み合わせ別による皿数合計の割合

	キャミ ミニスカート	キャミ ズボン	キャミ+カーデ ミニスカート	キャミ+カーデ ズボン
1～4皿	17%	42%	33%	34%
5～7皿	43%	16%	30%	47%
8～10皿	40%	42%	37%	19%

4. 自己対象化に関する各尺度の検討

(1) SOQについて

Fredrickson et al. (1998)のSOQ算出法に従い、外見項目 (appearance-based items : 項目番号3, 5, 6, 8, 10の計5項目)の合計から能力項目 (competence-based items : 同1, 2, 4, 7, 9の計5項目)の合計を引いた値をSOQ値 (-25~25) とした。値が大きいほど自己対象化傾向の高いことを示す。SOQの平均は0.46 (SD=12.45) であった。

(2) OBCの因子構造

Table 7 OBCの因子分析結果

	I	II	h^2
I 身体の監視 ($\alpha=.79$)			
15 他人の目に映る自分の姿を何度も考える日がある。	.66	-.06	.44
19 自分のなりたいと思う姿でないと、恥ずかしい。	.60	.03	.36
18 自分の着ている服が似合っているかどうか気になることがたびたびある。	.54	-.13	.31
16 容姿を整えるためできる限りの努力をしない自分はだめな人間だと思う。	.54	-.05	.29
6 端正な容姿に見えるよう努力しなかったとき、自分のことを恥ずかしいと思う。	.50	-.15	.27
22 容姿よりも体力があるかどうかに関心がある。*	-.44	.00	.20
5 自分が他人にどう見られているのか、ほとんど気にならない。*	-.52	-.00	.27
1 私は自分の容姿についてはめったに考えない。*	-.59	-.08	.36
11 自分の外見と他人を比べることはめったにない。*	-.61	.10	.38
II コントロール信念 ($\alpha=.70$)			
14 自分の容姿を十分に管理することはできないと思う。	.08	.55	.31
23 自分の体型は遺伝的にほとんど決定づけられていると思う。	.08	.49	.25
20 自分の体重はほとんど同じなので、変える努力をしても無駄である。	-.21	.48	.28
13 人の体重は遺伝的にほとんど決定づけられていると思う。	.17	.46	.24
12 必要なだけの運動をしなくても、どこか具合が悪くなるとは思わない。	.08	.36	.13
7 健康であるためには、まず第一にそのような身体を持つことである。*	.05	-.32	.10
17 やろうと思えば目標の体重に変えることができる。*	.15	-.44	.22
10 努力さえすれば、人は自分のなりたい容姿になれると思う。*	.14	-.54	.31
二 乗 和	3.31	1.94	
寄 与 率 (%)	14.03	8.18	

* : 逆転項目

本研究で用いたOBC24項目は、「身体の監視」(8項目)、「身体の羞恥」(8項目)、「コントロール信念」(8項目)の3つの下位尺度を持つ。そこで、この尺度について因子分析(主因子解、バリマックス回転)し、固有値1.00以上で因子数を決定した結果、2因子が抽出され、第1因子が「身体の監視」に、第2因子が「コントロール信念」に対応すると考えられた。因子負荷量0.30以上を基準に、「身体の監視」として9項目、「コントロール信念」として8項目を選択した。また、この下位尺度の内的整合性を検討するためCronbachの α 係数を算出したところ身体の監視で.79、コントロール信念で.70となった(Table 7)。各下位尺度の得点は項目の単純合計得点

とした。

5. 自己対象化の個人差

トップ(2)×ボトム(2)別にSOQおよびOBCの下位尺度の得点を算出し (Table 8), 分散分析を行った。その結果, 「身体の監視」はボトムの主効果が有意 ($F(1,139)=5.36, p<.05$) であったが, SOQと「コントロール信念」では有意差が見られなかった。

Table 8 服の組み合わせ別によるSOQ、OBCの得点 () : S D

	キャミ ミニスカート	キャミ ズボン	キャミ+カーデ ミニスカート	キャミ+カーデ ズボン
SOQ ¹⁾	0.74(12.25)	-1.83(13.07)	1.91(11.59)	2.08(12.59)
身体の監視 ²⁾	29.74(5.18)	27.81(5.40)	29.74(4.94)	27.58(4.97)
コントロール信念 ³⁾	16.03(4.72)	15.52(4.56)	16.19(4.21)	16.27(3.96)

得点の範囲は¹⁾ -25~25点, ²⁾ 9~45点, ³⁾ 8~40点

6. 身体の羞恥の重回帰分析

服の組み合わせ別に身体の羞恥の平均値を算出したが (Table 4), 理論的な得点の範囲からするとそれほど高い身体の羞恥であるとは言えない。そこで, 自己対象化理論に基づき, 身体の羞恥を引き起こすと予想される要因 (現在のBMI, 服の組み合わせ, SOQ, 身体の監視, コントロール信念, 友人評価) を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果, 「身体の監視」と「友人の評価」が有意な説明変数であることが示された (Table 9)。

Table 9 身体の羞恥についての重回帰分析 (標準偏回帰係数)

説明変数	身体の羞恥
現在のBMI	.06
服の組み合わせ	.06
SOQ	.09
身体の監視	.20*
コントロール信念	.08
友人評価	.56**
重相関係数	.67**
F値	9.55 df(6,84)

* $p<.05$, ** $p<.01$

考 察

本研究では, ファッションや自己の身体に対して強い関心を示す青年期女子の中でも女子高校生を対象に, 状況的自己対象化の高まりは自己の身体への意識やその後の食行動にどのような影響を及ぼすのかについて検討した。またそこには個人差要因としての特性的自己対象化がどのように関わっているのかについても検討した。このそれぞれについて得られた結果を整理し考察する。

1. 身長・体重について

現在の身長・体重, またこれから算出されるBMIを理想とする各値と比較してみたところ, いずれについても有意差が見られ, それらを併せると現在よりも背が高く, やせた姿を理想としている。BMIの分布を見ると, 肥満学会が定める標準値22を超えるものは全体の10%であり (うち過体重は4%), やせの域は65%を占めた。「自分は太っている」と認知しやすいのは, 客観的に見て, 「やせ」あるいは「標準」に属する女性で, むしろ「肥満」の女性は自分をそのように

とらえていないという興味深い結果も報告されている (Polivy, Herman, Hackett, & Kuleshnyk, 1986)。女性は自分の身体に不満を抱きやすいと先述したが、本研究の「身体変化」を詳細に見たところ、主に体重に関わる特定の部位を今より変えたいという回答が多く、漠然と身体全体の不満というよりは体重に関わる身体への不満と限定できるかもしれない。

2. 状況《場面1》に関して

トップに合わせたボトムを選択によって、身体の羞恥、友人評価で差が見られ、身体露出の多い「キャミ・スカート」条件だけでなく、最も身体露出の少ない「キャミ+カーデ・ズボン」条件でも身体の羞恥が高く、友人にも否定的な評価を受けると予想していた。トップはあらかじめ決められていたものの、ボトムは自由選択であり、そこで敢えてズボンを選んだのは、自己の容姿に対する潜在的な不満から身体を「隠した」のではないかと予想して「身体変化」の項目を用いて他の3群と比較してみたが、差は認められなかった。「キャミ+カーデ・ズボン群」に関する結果は、自己対象化では説明できないのだろうか。

3. 状況《場面2》に関して

(1) トップとボトムの組み合わせによって、お菓子を取る皿数に違いがあるかどうかを調べた。Fredrickson et al. (1998)では、身体の羞恥が高いほど、見かけの食の制限ともいえる「象徴的制限群」の割合が高かったが、本結果においても、身体の羞恥の高かった「キャミ・スカート群」と「キャミ+カーデ・ズボン群」で取った皿数が中程度の者の割合が高いことが確認された。しかし、この2群において皿数の程度の高・低の割合を比較したところ全く対照的であった。キャミ・スカート群で、8~10皿取った者の割合の高さは、「自覚状態」からの逃避と言えないだろうか。その一方で、キャミ+カーデ・ズボン群では、他の3群に比べて普段から甘いものは控える傾向にあり、さらに自己知覚の高い状況であっても食の抑制が効いていたものと言える。

(2) ダイエットでは一般に高カロリー食品は控えられる。そこで、カロリー値に基づくお菓子の選択があるかどうか上下の組み合わせ別に検討したのだが、全く差が見られなかった。お菓子をカロリーの値よりは好きかどうかによって選んでおり、洋菓子イコール高カロリーとは捉えられなかったようである。また、「バイキングではたくさん食べなければ損」という心理が働くためか、食の制限を検討する場面設定としてはふさわしくなかったかも知れない。また、筆者の意図に反し、場面1と2は一連のものとして捉えられていなかったのではないかとこの疑問が残る。

4. SOQとOBCの尺度としての有用性について

SOQ, OBCとも筆者自身の和訳によるものであるが、回答形式等についてはオリジナル版に従った。SOQについては、重要度のランク付けをするのに最重要項目に9をつけるという回答の仕方に戸惑った者も多く回答ミスへとつながってしまったようなので、今後SOQを用いる際には、回答形式を改良する必要があるだろう。また、外見項目の和から能力項目の和を引いた値が、自己対象化特性の測定に適切かどうか妥当性についても検討の余地があるだろう。

OBCについては、オリジナル版で身体の羞恥を構成していた項目は「身体の監視」に含まれてしまったが、この因子との高い相関($r=.66$)がオリジナル版で認められているので、抽出した2因子は構造的には問題ないと言える。

5. 調査の設定した状況で、自己対象化は実現したといえるか?

身体の羞恥を状況的自己対象化の現われととらえ、これを目的変数とした重回帰分析を行った

ところ、有意な説明変数となったのは「友人の評価」と「身体の監視」の2つであった。このことから、状況のおよび特性的要因いずれから、他人に見られるということが身体の羞恥さらには自己対象化を高める要因となることが明らかとなり、Fredrickson et al. (1998)やMckinley et al. (1996)の見解を実証する結果であったといえる。しかし、特定のトップとボトムに着用による自己対象化は確認されず、またいずれの組み合わせ群においても身体の羞恥の平均値は理論上の中点(30点)を上回るものではなかった。服は個人の嗜好が大きく反映するもので、今回刺激として用いた服が身体の羞恥を生じさせるに足るものではなかったのかもしれない。ただ、本研究は試着場面・バイキング場面ともに想定してもらうという手法であり、質問紙上の回答と実際の行動との間には少なからずギャップのあることが予想され、今後は実際場面での行動の測定により自己対象化を検証する必要があるだろう。また、自己対象化には他人の存在の有無が大きく影響することが確認されたので、これに関する統制群の設定も加えるべきだろう。

謝 辞

本稿の作成に当たり御指導を賜りました京都大学大学院教育学研究科子安増生教授に深く感謝致します。

註

- 1) BMIとは、体重(kg)÷身長(m)÷身長(m)で求める体格指数(body mass index)であり、国際的な基準として用いられている。日本肥満学会でもその標準数値としてBMI22を提唱しており、19.8未満を「やせ」、19.8以上24.2未満を「普通」、24.2以上26.4未満を「過体重」、26.4以上を「肥満」と分類している。
- 2) 本稿の一部は日本社会心理学会第40回大会(1999)で発表されている。

引 用 文 献

- Carver, C.S., & Scheier, M.F. 1982 Control theory: A useful conceptual framework for personality-social, clinical, and health psychology. *Psychological Bulletin*, **92**, 111-135.
- Fredrickson, B. L., & Roberts, T. 1997 Objectification Theory: Toward understanding women's lived experiences and mental health risks. *Psychology of Women Quarterly*, **21**, 173-206.
- Fredrickson, B. L., Roberts, T., Noll, S.T., Quinn, D.M., & Twenge, J.M. 1998 That swimsuit becomes you: Sex differences in Self-Objectification, restrained eating, and math performance. *Journal of personality and Social Psychology*, **75**, 269-284.
- Heatherton, T.F., & Baumeister, R.F. 1991 Binge eating as escape from self-awareness. *Psychological Bulletin*, **110**, 86-108.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- Mckinley, N.M., & Hyde, J.S. 1996 The objectified body consciousness scale: Development and validation. *Psychology of Women Quarterly*, **20**, 181-215.
- Muraven, M., Tice, D.M., & Baumeister, R.F. 1998 Self-control as limited resource: Regulatory depletion patterns. *Journal of personality and Social Psychology*, **74**, 774-789.
- Polivy, J., Herman, C.P., Hackett, R., & Kuleshnyk, I. 1986 The effects of self-attention and public attention on eating in restrained and unrestrained subjects. *Journal of*

personality and Social Psychology, **50**, 1253-1260.

Tangney, J.P., Miller, R.S., Flicker, L., & Barlow, D.H., 1996 Are shame, guilt, and embarrassment distinct emotions? *Journal of personality and Social Psychology*, **70**, 1256-1269.

辻学園 日本調理師専門学校（監修）1992 エブリディ・クッキング 学習研究社

（博士後期課程 3 回生，教育心理学講座）